

## 柴田 翔・ロクタル考

白石 一美

A Study on Rock-in-octal tube's story by Sho Shibata

Kazumi SHIRAISHI

### 序

柴田 翔に1960年発表の短編小説『ロクタル管の話』がある。読解上、気がかりの点について辛口ながら電子技術本位に所見を述べてみたい。

さて作者柴田 翔には『されど われらが日々——』という芥川賞受賞作もある。

地方の国立大学に赴任見込みの外国語系の大学院生、私は婚約者の女性と近く結婚する予定であったが、友人だった故人のあれこれから婚約者は私から離れ、気がついたら彼女との間にヒビが入った私がいるのだったとか、『われらが日々』はそのような話であるが、『ロクタル管』も同じくヒビの入った真空管の話である。

なお、論述の依拠テキストは、以上二作がワンセットで収められた文春文庫『されど われらが日々——』(1974年6月文芸春秋社発行・1980年1月第13刷)に拠った。

### ベース・その1

作品中の用語を吟味する。次の引用はロクタル管の物理的形態を説明する部分である。引用文中の符号【 】は論者が附したものであり、僭越ながら読解に際して除去が望ましいかと考えた箇所である。

ロクタル管という奴は実に確かな姿をしていた。直径約三センチ、高さ約六センチのガラスの円筒の中に、……(中略)……。円筒の下部にはGT管のような黒い大ゲサな、ベークライトのベースはなく、ただ、底面と側面、およびその両者の交わる角を保護するために、少し赤みを帯びて光る白い金属【のベース】が側面のごく狭い幅と底面を包んでいた。そ【してベース】の底面の正確な丸形の小さな八つの穴の各々の中央からは、ガラス面から直接突き出た、電極に電気を伝える役目をする、短い、堅い【、銅の】脚が八本出ている。それらの脚の根元には、それらを支える硬いガラスの厚い小さな山が金属の穴にぴったりと盛り上がっている。それらの脚の一本を少し無理にねじれば、脚が折れるより先に、それを支える厚い硬いガラスの底面にぴしりと一筋の割れ目が走りそうだった。(197頁)

真空管の詳細は専門書に譲って省略するが、文中「白い金属」云々の箇所はベースではなく防護金属（ガードメタル）である。（本稿末尾掲載写真A参照「ロクタル管」と貼紙の部分。Cは論者が防護金属を除去したロクタル管）

「銅の脚」とあるが、脚ピンに銅を使用すれば、真空管取扱上、軟弱にして脚がグニヤリと曲がり直立しない。銅は非磁性金属ゆえ磁石に吸着されず、ロクタル管の脚は磁石に吸着する。詳細を省くが合金を用いているのである。

引用本文の補釈 「両者の交わる角」云々、本文を素直に読めば、バルブの裾部分の保護の意である。この部分、金属円板の単なるプレス加工（裾は直角R）ではなく、裾部分の二重強化、ガードメタルを√状に折畳んだ上げ底加工の謂かと解される。

（写真A ロックキーの先端と防護金属の裾がなす直線に脚ピンが保護され死角に入る。折畳みをキツく上げ底をうんと深くすればピンは隠れる。写真C、ピンが長く見える。）

「底面と側面、および両者の」云々は幾何学的表現であり、「無理にねじれば」と併せ読むに作者の無意識裏に死角や人為的力が含まれていたか、とも読者には想像される。

#### ベース・その2

次の4例は、1950年6月の朝鮮戦争当時、15歳、中学3年の少年たちがラジオセットの組立に関わる作中場面である。記述内容から、作者は1935年生まれ（のち東大工学部より文へ転学部）ゆえ、中学当時の組立体験が作中の背後に存在したかとも想像される箇所である。

- 1 だが、あの頃のぼくらのラジオへの、いや、より正確には、一般に真空管を使って、ある回路を作ること、への熱中には、実際一種特有のものがあつた。ハンダごてを使って、真空管の脚をさし込むベースや、コイル、バリコンなどの間を針金でつなぎ合わせ、その間に抵抗やコンデンサーを挿入して回路を作つて行く時、(200頁)
  - 2 整流管を除いて他の真空管をみなベースに差し込んで、スイッチを入れる。(204頁)
  - 3 真空管が差してあつたか、なかつたかを問題にすることなんて自体、(208頁)
  - 4 「……。それでさ、大きなもんはずしちやつたんだよ。それでさ、抵抗とコンデンサーだけ残っているシャーシの裏を見たら、急にやけになつてさ、思わず床に叩きつけちやつたんだよ」(209～210頁)
- 1 シャーシ内部に配線してゆく様子である。抵抗器など小物部品をねじ止めされたラグ端子板やソケットに半田付け配線するのである。文中「ベース」は明らかに「ソケット」の意である。それをなぜか「ベース」と表現している。2も同様である。
  - 3 真空管をソケットに差したか、どうか、の意であつて補語が欠落しているが、前後の文脈（引用省略）に助けられて、補語が絶対に必要である、とはいえない箇所である。
  - 4 少年が組み立てたセットが、乱雑な配線や不適電圧ゆえにか発振トラブルを誘発、やけになつてセットを床に叩きつけた条である。(206頁～211頁へと読み進むにつれて) セット全体

を叩きつけたのではなく、「シャーシと抵抗とコンデンサー」だけを叩きつけたことが徐々に明らかになる。理想的な英雄の行為は卑小な行為と化す。抵抗やコンデンサーといった小物部品をボディ（シャーシ）に取り付けるにはラグ端子や真空管ソケットに半田付け配線する。一介の読者としては「ソケットは？」との思いがあるが、この思いは3度4度と繰り返される「シャーシと抵抗とコンデンサー」の裏に言わばゼロ記号の陳述として表面から消去されてゆくようである。

以上、作中場面では組立に必要なソケットが「ベース」又は無表記となっている点を確認しておきたい。

#### 専門文献におけるベース・ソケットの用例

各種の『真空管便覧』などよりその用例を見る。

◎ 『MATSUDA VACUUM TUBES HANDBOOK 1953』（註①）によれば、真空管1A3のベースは、ミニアチュア（形状）・ガラス（材質）・ボタン（ステム）・7ピン（脚）であるとする。同書「マツダ受信管新旧対称表」の項（14頁）には「ソケット」なる語があり、同書のマツダ二次電子増倍光電管MS-9Sの項に「ベース サブマグナル11脚」・注意の項に「口金は特に絶縁の高い特殊のものを用いておりますからソケットの絶縁には特にご注意下さい。」（29頁）とあり、ベースとソケットを区別する。

◎ 『RCA receiving tube manual (RCA受信真空管便覧)』（註②）にこう記す。

7N7 中増幅率双三極管 ……ロック・イン・ガラス管 ……  
ロック・イン・ソケットを要し、(263頁)

6C6 ……この管には6極ソケットを用いる。 …… (183頁)  
ベース、同書(66頁)のMT管イラストに「ベース・ピン」と記す。

◎ アチラのほうではどうか。やはりベースとソケットとを区別する。

米国ウエスタンエレクトリック社製真空管の英文使用説明書（註③ 上巻290頁）

「300B Vacuum Tube」の「BASE, SOCKET AND MOUNTING」の項

This tube employs a standard four-pin thrust type base suitable for use in a Western Electric 143B or similar socket.

当該管がWE143Bもしくは相当のソケットに適合する4本脚のベースを備えているとの記述、アチラでもベースとソケットを区別している。

以上の調査から、本作品における「ベース」なる語には電氣的に厳密には問題がある。省略曖昧化された箇所があり、作品読解上、辛口ながらベースをベースに差し込むとも言うべき矛盾の存在を指摘しておきたい。

#### 発想

なぜ矛盾なのか。発想が高すぎるのではないか。ありていに低い処から発想しても良いので

はないか。我々からは遠い彼方の世界・公式的観念の一例を次に挙げてみたい。

電気回路における電圧電流などの測定は困難である、測定したとたん誤差を生じる、真の値は測定の彼方、我々のつかみ得ない遙か彼方の純粹の世界に存在する、といった趣旨が作品中に記されている（200頁～204頁）。多々あるが具体例を一つあげる。

それは勿論、測定器と言うものはある。しかし、それは多くの場合、所詮電気現象を機械的現象にかえて視覚に訴えるのであり、電気現象そのものを示しはしないし、そのすり替えは仮に我慢するにしても、第一、測定器を回路に入れること自体が、ぼくらが空想し、創り上げた回路の純粹性をこわしてしまう。（201頁 次の頁には測定の不可能性を説く。）

そう言われれば誰も否定出来ない。その通りであり、中学三年生が主人公であり、一応、その年代を読者に据えたかのような脚色の中、彼らの純粹好みにうけるかと思う。小説はその高みから頭を冷やされ、下ろされる方向に進むのであるが、絶対の純粹は観念であって現実ではない。例えば7N7について「黒々と光る電極が二つ、みじんの相違もなく位置している様子は」云々（221頁）、「7N7は双三極管だから」（221頁）2組の真空管が1個のガラスバルブ内に封入されている。2つに同一の電氣的条件を与える。2つのカソードをともに接地、2つのグリッドを電線で結んで同一のマイナス電位を与える。さてスイッチで切り替えてそれぞれのプレートに負荷をかけるが、電流計を回路に入れれば無論測定誤差は生ずる。しかし、誤差状態の読取値において「みじんの相違もなく」それぞれのプレート電流が一致するかというに偏差の大きいことに我々は驚くであろう。それが現実であり、この現実から特性曲線を追求してゆくのである。向かう考えの方向が逆である。

如上の純粹世界を次のように見る専門家もいる。これが現実である。

我々が平常使用する真空なる言葉は容器内の気体の圧力が極めて低いことを表す術語であつて容器内の気体が皆無なることを意味するものではなく、又斯る状態を人為的に実現することは不可能である。現在到達し得られる最高の真空度は水銀柱で大体  $10^{-11}$ mm の程度であつて、この状態でも一立方糶内に尚数十万個の残留気体分子を有することが計算の結果分る。我々が不断取扱ふ真空管の真空度は高々  $10^{-5}$ 乃至 $10^{-6}$ mm に過ぎず、従つて残留気体は一立方糶当り数十億個の多数に上るわけであるが之を我々は一般に真空と呼んで居るのである。（電子が管内残留気体分子と衝突する回数が少なく、電離現象が管の動作に悪影響を与えない程度であれば支障ない旨を記し）真空管の製作法とは要するに前節に述べたやうな電極や部分品を組立てて容器内に封入し之を排気して適当な真空度に相当時間保ち得るやうに操作を施すことである。（註④ 92頁）

さて、前述の高みの設定の考察を続けるに、実は戦前乃至戦中の日常家庭用の旧式ラジオが作品の裏に存在しているのだが、主人公たちが高級セット多分プロセットを組み立てたと判断される場面を次に引用する。製作技術上、中学生の手に負える代物ではなく、発振トラブルは当然とも思われるのであるが、場面に残る旧式ラジオの名残を次に確認しておきたい。

A ……、ぼくらは考えた。DX用なら、そしてノイズリミッターもついているなら、最小限七本か八本は真空管が使っている。ことによったら、漸く手にいれたロクタル管も一本か二本は使っているかも知れない。それにバリコン、きっとバンドスプレッド【用の特製豆コン】だつておごつてあったに違いない。その上、それに劣らず貴重なコイル、微動ダイヤル、パワートランス。それら全てのついたDX用セットを床に叩きつけて、けつとばした。しかも、ただぼくらの憧れる世界がその確かな在り方で現われないという、本当に純粋な怒りにかられて。ああ、その勇氣！ その誠実！（207頁）

B「へえー、……。それにさ、バリコン、特にバンドスプレッドの奴なんか、ちょっと狂うと使いものにならないぜ」（208頁）

短波受信用バリコンを話題とする。B「奴なんか」の趣きから主副一体型バリコンらしく思われる。1個のバリコンに主軸副軸があり、主ギア副ギア2組の歯車の減速比を利用して、放送局の周波数に精密同調するメカニカル方式と、電子方式と2方式ある。一体型らしいが機械方式か電子方式か不明である。

引用A、明らかに電子的スプレッドであるが、親バリコンに子バリコンを同居させた前述の一体型と主副別々2個より成るセパレート型とがある。電気規格が2個ワンセットで設計製造・実用回路に供せられる精密バリコン（周波数直線型または波長直線型）であり、設計上、副（子）バリコンだけの単独扱いは不可。特製セパレートの趣きである。

引用A、「特製豆コン」とあるので、「ああ、あれか」である。アマチュアが行う改造、戦前の再生式ラジオの豆バリコンの羽根を1・2枚だけ残し粗方抜いて作ったサブバリコン（容量直線）である。（コンデンサの電気容量を70ピコファラッド程度より10PF程度に削減）

文部省指導の下、再生豆コン使用の3ペンラジオは昭和35年頃まで中学校技術科における現役教材であった。戦後、GHQの命令下、再生式は振動電流の輻射妨害ゆえに製造販売を法的禁止、スーパーへと移行した。再生が効き過ぎてギャー雑音を発する送信機と化して周囲の家庭等に迷惑を及ぼしたという。一説にその輻射妨害電波は駐留米軍がソビエトや中国の放送を傍受する妨げになった云々。教育目的の3ペンラジオ、その組立キットは単なるパーツの集合であり、未製造にして販売目的ではないので、この限りでなかった。中学生の現実には3ペンである。（ペントード〔5極管〕2本・整流用ダイオード〔2極管〕1本、都合3球）

結局、スプレッドもロクタルも高嶺の花、オシログラフ同様、将来社会にでて働けば購入できる、駐留米軍下の中学生のかかる将来展望辺りに作者の構想が散見されるかと思う。

作品の現実を3ペン辺りに置いて、これを基準に中学生に理想を迫らせ現実に戻る構想も一方法かと思う。しかしそれでは辛口に過ぎて作者は身も蓋もない。3ペンを除外して作者の路線に従うが、夢想DXの組立に懸念の残る箇所を探る。やはりソケットか。

### 虚像

次の文章には米国製特殊真空管への憧れと観念化された美があるように思われる。

あのロクタル管の美しさが結局のところ、そういうぼくらの憧れの対象たる美しさの質を、目に見える形で一番よく代表していた。ロクタル管の美しさ自体は、いわば虚像の美

しさであったと言えるかも知れない。しかし、その虚像を通して、ぼくらの憧れが指向していたのは、あの、ぼくらが見ることなく信じる、曖昧さの全くない、確定的な正確さを持った電気現象の世界だったのであり、まさにそれ故に、ぼくらにとってロクタル管は美しかった。(212頁)

以上は文学的である。現実にはロクタルに限らず電気の世界はバラツキと妥協の世界である。観念化された高みから中学生に発想させる脚色かと思われる。

ぼくの欲しいのはロクタル管といったって、別に7F7とか、7A8とかいう、本当に誰もが飛びつきたくなるような球たまでなければいけないのではない。7A6や、14C7だって、ロクタル管である以上、他のどんな種類の真空管より堅牢に、正確にできているのに違いないのであり、多少使いにくいという問題だって、それを使いこなすのがぼくらラジオオマニアの腕の見せ所であり、誇りであるはずであった。(216頁)

「多少使いにくい」原因はソケットの入手難であろう。ヒータ電圧の供給は6.3V又は12.6Vゆえパワートランスに6.3V巻線が2組あれば「腕の見せ所」以前の話である。

ある真空管の座談会に次のような発言がある。

浅野 航空機用として、例のロクタル管が7Vです。(白石注 ヒータの電源たるバッテリー蓄電池の)チャージ・アップのことを考えて、7V, 14Vですよ。

小川 規格にハッキリとヒーター電圧は6.1Vから6.9Vの間で使う。ただレイテッド・バリューは6.3Vであるということを明記していますね。

浅野 ロクタル管というのは、日本では全然ダメだったんだ。

小川 ソケットの問題もありますね。(註⑤ 上巻281頁)

ヒーター電圧変動率の悪い粗悪トランスでもOK、雑音発振対策として内部シールド・裾のシールドガードもガッチリ、少々雑な配線でもOK、ロクタル管の方が在来管よりも寧ろ使い易い。使い難いのは電気方面に起因するのではなく、周辺パーツ、具体的にはロクタルソケットの入手難に尽きるのではないか。柴田先輩に準じて中学生がロクタル管を入手してセットを組む時、まずソケット入手難に突き当たる。作者の体験をも含めて、その故にソケットなる語の明記がなく、曖昧化されたのではないか。

米軍の廃棄(ジャンク)真空管等が神田の露店に並ぶ風景が作品に現れる。米軍では一定期間経過後の真空管はその良否に関わらず廃棄されて新品に置き換えられる。我々の蛍光灯同様、消耗品であり、通信機器の保守管理、機器動作の確実性・信頼性ゆえの措置である。

廃棄真空管が神田の露店に出まわるとしても、個人の運搬に重くてタクシーを要する米軍の通信機が廃棄されない限りソケットの入手は難しい。

製造工程上、真空管の製造は複雑にしてソケットは単純である。ソケットの故障は、金槌で叩くなど故意の破損や管熱焼損(焦げ)を除けば、サビによる接触不良が殆どである。故に絶対不良率・絶対生産数ともに真空管がソケットよりも大きいと思う。更に次の指摘がある。

ロクタル管のソケットは海外製品に頼らざるを得ませんが、ロクタル管自身がかつて日本で作られたことがないという事情から考えれば止むを得ないことです。

戦後3Qなどから簡単なウエファー・ソケットが放出管を使うアマチュアのために若干市販されていたこともありますが、この時代の日本製機構部品は材料などの不備もあって、**7C5**や**5AZ4**など消費電流の大きなロクタル管用としてはトラブルの原因となったことが多く、中古ソケットを利用する場合に注意を要します。

(註⑥ 下巻240頁 同書29頁にロクタルソケットの写真を掲載)

アマチュア相手では市場規模が小さくて利潤の先行きは暗い。加えてソケットのキーロック特許にはロック自動接地シールドなど許諾ライセンスがからみ、国産数は少量と思われる。

ことによったら、漸く手にいれたロクタル管も一本か二本は使っているかも知れない。

それにバリコン、きつとバンド…… (207頁)

と使用の可能性を想像させる。しかし、現実はどうか。

(実は論者の手元にロクタルが2本あるがソケットは0である。)

で、セット作りをどうするか。この道の先達のご苦勞を2例(註⑦)要約紹介する。

1つはロクタル管のGT管化(改造)、いま1つはロクタル管をシャーシに縛り付けて脚ピンに電線を直接半田付けしてノンソケット化すること、この2つである。

前者、不良GT管の袴を転用する。ロクタルのガードメタルを除去して脚ピンにリード線を半田付け延長、ガラスバルブをGT管の袴に嵌めこんでリード線を袴の脚ピン先端に導いて半田付け、GT管化する。袴の内径(約3cm)とバルブの径が等しいからである。

後者、円柱型ケミカル立型コンデンサのねじ止め金具の転用。ロクタルの腰、ガードメタル部をバンド金具でねじ締め、金具の脚部を2本のねじでシャーシに固定する方法。

ロクタルの脚ピン(合金)の半田付けが難儀の模様であるが苦肉の策ではある。しかし、もはやロクタル本来の在り方ではない。

## 花火

作者は作品中に二発の花火を上げている。一発目は、仲間がセットの発振トラブルに悩んだ挙句、セットを床に叩きつける条、ここは平家物語の硫黄嶋俊寛の心理描写にひき比べて読むと面白いが、駄物ばかりを床に投げつけたことが露見する経過が次第に明らかとなってゆく、言わば徐々に冷やされる過程であり、これが一発目。

二発目はロクタル管のヒビ割れを発見して「逐にはそれを道路に叩きつけたのではなかったか。そして、ロクタル管の砕け、飛び散るその音と共に、何ものかがあの頃のぼくの中で死んで行き、そして何ものかが生まれてきた筈ではなかったか」云々の条、ここでは徐冷過程が叙せられず、余韻として残り、作品は終わる。

作者はロクタル管を高価な真空管と位置づける。朝鮮戦争当時の国家公務員等給与改定勧告に拠れば昭和25年勧告は8058円・実施は7981円となっている。作者はロクタルが高価であった

旨作中何度か記す。曰く850円、曰く900円云々。怪しげな店で7N7を200円で購入、帰り道、よく見るとヒビ割れの傷物であり失望する。店にかけあって全額戻戻しを希望した処、半額の100円札1枚と球を貰って追い返された、という。かけあう前になすことがある。

(7N7を)じっとみつめると、内側からふきつけられた銀のシールドがガラスの壁面に輝き、その中には黒い電極が二つ並んで、少しの狂いもなく固定されている。……

どれ位の時間、見とれていただろうか。ふと、いや目の迷いか、まばたきをしてみる、がやはり短い脚の一本を支える、小さな、硬い、厚いガラスの小山に一本のかすかな線が、亀裂かも知れぬと思えなくもない線が、認められるではないか。ぼくの心臓は途端に早鐘のように打ち出した。どんなにかすかにせよ、亀裂が入ったら使えない。……。その厚いガラスには、長さこそ短く太さもごくかすかではあったけれども、表面だけではなく厚みの全てを貫いて、一本の疑いようもない亀裂が入っているのだ。……。ぼくは絶望の余り……、その球をただ砕けよとばかりぶつけようとした。(221～222頁)

文中「銀のシールド」(註⑧)とはゲッター膜である。真空管製造の終了間際、ゲッタ飛ばしと排気管封じを行う。真空ポンプで空気を排気しつつ電極を高周波コイルで加熱して残留ガスを排出せしめ、排気終了直前、ゲッタを飛ばしてゲッタ膜を内壁に形成、排気管をバーナで熔融封止(註⑨)して製造が一応終了。あとはエージング処理される。

ガラスバルブ内に残留する空気と金属中のガス分子を完全に除去することは不可能である。

実用電気回路において真空管が高温作動中、電極内部の残留ガスが析出、このガスを吸着して管内の真空度を保つのがゲッタの役目である。

文芸的虚構なのだから仕方ないと言えばそれまでである。時代劇の時代考証ならぬ物理考証めくが、矛盾めいた点に違和感が残る。

◎ガラスに大きい亀裂を見出した模様であるが、ゲッタがバルブ内壁に燦然と輝いていることは真空度を保つ証明と思うがこの点はどうか。

亀裂が大きく、これがために管内に空気が入ったら、色はゲッタ薬品にもよるがゲッタ膜は忽ちのうちに鏡面の如き輝きを失って、乱反射性の白色となる。乱反射性とは黒板に用いる白墨(チョーク)の如き色である。鏡面的輝きと白墨の色とは、銀鏡と白と類似するかとも思うが、光の反射率が異なって区別可能である。管の機能消失以前のガラス割れには変色を伴う。なお、長期使用に耐えてガス吸着の挙句、所謂ポンコツ化。膜が完全に消失した球においても空気の侵入とエミッション減退(エミ減 熱電子放射能力の低下)がない限り管は作動する。◎音による確認 空気が侵入した球は管壁を指ではじくとポコッポコッと低い音がする。空気のためにブレーキがかかって電極がふるえない。これに対して未侵入の球はカーン・キーンという高い音がする。空気の制動がないからである。(判別には経験を要する。)

◎主人公が帰宅後とるべき確実な方法はメーターを用いた電子的確認である。

乾電池4～5個を直列接続して7N7のヒーターを点火、テスター(回路試験器)抵抗計測レンジ、赤リード線を真空管のカソード・黒リードをグリッドに接続、メータの針が動けば電子移動の証明、即ち管は生きている。生きていればガラスこぼれ(ボタン割れ)はあるが低価格相応の7N7であろう。チェックが必要であり、鏡面は輝いている。



## 結

朝鮮動乱期、米軍駐留下の日本、戦後社会の雰囲気や少年の心の変化になぞらえて、あらためて自問した、言わば頭を徐冷する秀れた戦後再建小説として読み得る作品である。

文芸方面を粗方略して、作品を成立せしめる素材レベルの語としてベース・ソケットを中心に細部の小さな問題の所在を指摘した。電子技術面、やや特殊な視角からの考察で非礼にわたる点、お詫び申し上げる。

作品面、寸言すればやや観念的な高い発想から小道具を米国にひきよせる余り、小道具のイメージ、結晶としての統一イメージがいま少しという読後感が残った。しかし、秀れた作品であることは疑いをいれない。

ぼくらがラジオを組み上げるのは大抵部室で、(セットを家に持ち帰り、夜半、スイッチオンの火入れ式) ブーンと軽いハム音が聞こえ、ふるえるぼくらの手がバリコンをまさぐり、それにすがりつき、盲滅法にそれをまわすと、突然、遙か彼方の異国から遠い空をわたってやって来た、耳をつんざくようなモダンジャズの一節が鳴りわたる。…… (中略) ……

親爺か兄貴がそこに突っ立っていて、怒鳴りつける。「一体何時だと思っているんだ。やかましくて寝られないぞ」気がつく、ぼくらのセットは早口の外国語で、コーリアン・ウォーがどうしたとか、レッド・チャイナがこうしたとか、訳の判らぬことをしゃべり散らしている。(205頁～206頁)

「遙か彼方の異国から」云々、海外短波放送かと思われる。バリコンを微細に回すが、フェーディング・空電・混信・もろもろの外來ノイズに遮られて短波の受信は容易でない。それにしても「耳をつんざく」ほど信号が強力である。委細略すが、内実これは駐留軍向けの東京FEN放送(中波)を受信しているのではあるまいか、と思ったりするのである。(文化遠而電波近矣) このような意味で、今一つイメージの統一をと思ったりするのである。

最後に柴田氏自身、『されど われらが日々——』の訂正に関してこう記されている。

……、作品内の事実関係に関する誤り(例えば同じはずの地名が異っている等)についての訂正を除いては、原型に戻すことを基本方針とした。…… (文庫本末尾254頁)

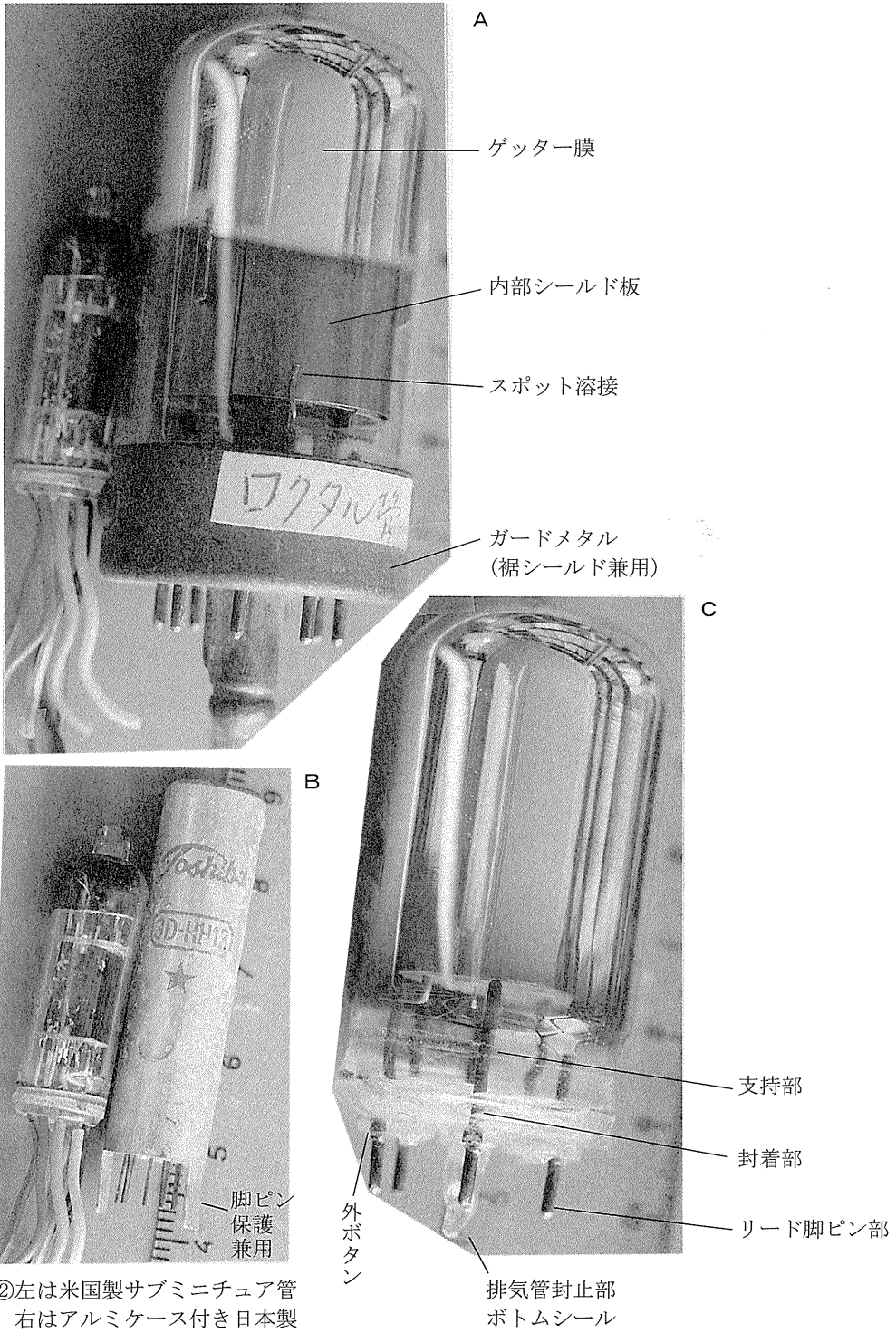
作者によれば文庫本化に至るまで何度かの組み替えを経ている模様である。『増補改訂新潮日本文学辞典』(1988.1 新潮社)井伏鱒二の項に、中学生の頃、「森鷗外の『伊沢蘭軒』のことで、その史実がまちがっているという反駁文を書き、うまうまと鷗外から返事もらった」(108頁)とあるが、井伏の『山椒魚』は本文に度々の改訂をみること、周知である。作品の本文改訂に小論が僅かでも資するところがあれば幸いである。

## 註

- ①マツダ真空管ハンドブック 昭和28年3月・東芝監修・誠文堂新光社
- ②RCA受信管便覧（日本語版）昭和30年11月・日本放送出版協会
- ③無線と実験編・浅野 勇監修（執筆）『復刻版 魅惑の真空管アンプ』（上巻・下巻）  
1990.1(上巻)・1990.6(下巻) 誠文堂新光社
- ④浜田成徳・真空管工学 昭和12年9月初版（19年10月第十版）理工学出版株式会社
- ⑤註③書に同じい。
- ⑥註③書に同じい。
- ⑦オーディオアイデア百科 昭和54年7月 誠文堂新光社（第94頁・佐円 章執筆）
- ⑧東芝電子管技術部編・真空管活用自由自在・昭和41年10月・誠文堂新光社  
ハム発生の原因とその除去法(6)光電子によるハムの項（31頁）参照  
ゲッタ膜がシールド効果ならぬ雑音を拾うケースの記述あり。なお脚ピン保護を兼ねた真空管の外シールドケースについては、写真B右側の東芝製3D-HH13参照  
管内シールド板については、写真A右側の真空管の内部、スポット溶接部分参照
- ⑨製造の全般については  
真野国夫・新居茂夫・『真空管製造技術』・昭和23年5月・修教社  
に詳しく、製造の基礎となる電極その他の個別材料については次の書に詳しい。  
電子工学講座・深川修吉『真空管材料・超高真空技術』1956年5月・オーム社

## 参考文献

- 一木吉典・全日本真空管マニュアル・1969.1（第11版1刷 初版は1958.9）ラジオ技術社  
真空管のさしかえ 3. ラジオ球のさしかえの項参照 第51頁 最近教材用として云々、ST管（ダルマ管）製造機はスクラップ化、製造業者の嘆きを記す。
- 実用無線工学・松村定雄『電子管』昭和33年10月・近代科学社（第294頁付録 mT管・サブミニチュア管・エーコン（どんぐり）管等の項）
- 電気工学基礎講座・吉田重知・電子工学・1965.1・朝倉書店 第79頁～81頁ほか
- 浜田成徳・註④書 第90頁～94頁
- 杉本 哲・初歩のアマチュア無線の研究・1959.11・山海堂 第11課148頁～169頁
- 東北大学基礎電子工学入門講座8・和田正信『真空管』昭和35年1月・近代科学社 180頁～186頁ほか



D

E

